Roshiashi Kenkyukai

David Schimmelpenninck van der Oye,
Toward the rising sun: Russian ideologies of empire and the path to war with Japan,
Northen Illiois University Press, 2001.

本書は日清戦争(一八九四―九五)から日露戦争(一九〇四―〇五)にいたる約十年間のロシア帝国の極東政策を論じたものである。

本書は二部からなっている。前半部ではこの時期の極東政策に強い影響を及ぼした四つのイデオロギーがその唱道者と共に紹介される。後半部はこれらのイデオロギーが実際の外交政策に影響を及ぼした様相を詳細に描いている。ロシアの主要な文書館の一次史料を含む、大量の史料を材料とした著者の議論は説得力に富んでいる。

前半部で紹介される四人の唱道者とは探検家プルジェヴァルスキイ、「アジア主義者」ウフトムスキイ、蔵相ウィッテ、陸相クロパトキンである。軍事力による領土拡張を主張し、アジアの諸民族に対する軽侮の念を隠そうとしないプルジェヴァルスキイ、東洋の文化に畏敬の念を抱き、東洋におけるロシアの使命を説くウフトムスキイ、軍事的な手段ではなく平和的(経済的)な方法による影響拡大を志向したウィッテ、防衛上の観点からシベリアへの漢人人口の流入を恐れたクロパトキン。前半部では彼らのこうしたイデオロギーが紹介されている。

後半部では、彼らの発言に代表されるこうしたイデオロギーが、実際の外交政策に反映されていく過程が詳しく描きだされる。日清戦争後の三国干渉、その後の遼東半島占領と租借、義和団事件への対応と撤兵問題、日英同盟への対応、日露交渉といった具体的な局面において、ロシア帝国の外交の当事者たちが事態をどのように理解し、何を指向して政策を決定していったのか。著者は前半部で論じたイデオロギーを手がかりとして、それぞれの局面における政策決定の過程を分析している。

著者は外交におけるイデオロギーの重要性を強調しつつも、相互の関係を単純化してしまわないよう注意深く論じている。著者は外交とイデオロギーの関係は単なる原因と結果の関係を超えた複雑なものだと述べる。これはイデオロギーの役割に注目した分析の末に提示された結論であるだけに説得力がある。

この研究はまた日露開戦の原因をさぐる研究でもある。その意味では、日本における日露戦争研究にとっても刺激となる論点が含まれている。例えば、アジアにおけるロシアの独自の使命を説き、その観点から清との善隣関係を主張したウフトムスキイらの思潮は当時のロシアの知識層にある程度支持され、外交政策にも少なからぬ影響を及ぼしていた。こうした見解は当時の露清関係を見直す契機になりうるだろう。本書はこの他の点でも新たな論点を提起する可能性のある魅力的な研究である。

(神長英輔)

NII-Electronic Library Service